

「降雨と土砂崩壊に関するシンポジウム」高松で開催

関 西 支 部

日本気象学会関西支部は、高松地方気象台と共催で、表記のシンポジウムを、11月30日に高松地方気象台会議室で行なった。当日は、気象官署職員のほか、香川大学や県庁職員等の参加もあって、聴講者は70名に達し、それにマスコミ取材者等、狭い会議室は一杯になった。四国地区理事でもある越智高松台長の、「昨年の大雨による被害状況からこのテーマを選んだ」旨の挨拶で始まり、身近な問題であったせいか、会は盛況裡に終わった。話題要旨は次のとおりで、木村観測課長の座長が進められた。

おもに降水量の再現期間からみた香川県の大雨について

高松地方気象台 安藤 章

大雨の再現期間4年の、日雨量、2日雨量および3日雨量の確率雨量分布から、香川県西部と東部では差異がある。西部は、低気圧や前線によるものが多く梅雨期に集中し、東部は、台風による大雨が主体で、西部の1.5倍、山地では2倍にもなる。この傾向は、再現期間8年以上になると、いっそう強調される。

香川県の風化花崗岩（マサ土）地帯における降雨と土砂崩壊（主に土石流）の関係について

高松地方気象台 安井春雄

大滝（1965）の手法による土中水分量と、マサ土地帯における土砂崩壊との関係を、過去二十数年間の7回の大雨を取り上げ、24例について調査した。結果は次のようにまとめられた。(1) 土中水分量を表わす超過保留量が100mm以上になると、土石流が発生する。(2) 先行雨量を差し引いた積算雨量（有効雨量）が150mmで、

時間雨量30mm以上の強雨があると、大きな土石流が起こる。

崩壊災害と雨の関係について

気象研究所 奥田 穰

崩壊災害は、強雨の場合に、地層のせん断部分や強度の不連続面で浸透水路を形成し、これが水管となって崩壊が起こる。この水管を維持し、あるいは増大させるような雨量強度は、10分間雨量5mm以上で、この強雨にさらされる時間が長いほど崩壊件数が増大する。

花崗岩地帯における土砂災害について

香川大学 斉藤 實

小豆島における土砂崩壊の現地調査の結果、地質構造上、表層崩壊が大部分で、谷頭付近で崩壊の生じる地点の勾配は、15°～45°で、そのうち、26°～30°が4割を占めている。なお、高さは30m～360mの範囲で、いずれも、尾根近くの傾斜の変換点付近の丸味を帯びた稜線付近で発生している。歴史的に見て、再崩壊は30%、そのうち、過去の崩壊地の隣接地域が70%を占めている。

土砂災害の研究

京都大学 中島暢太郎

ここ10年間の大雨災害を見ると、土砂災害による人的被害が増大している。土砂崩壊発生の予測には、集中豪雨の予報にまつほかないが、その場所の地形や地質が土砂崩壊を起こしやすい状態か否かを確かめることも必要である。このため、降雨状況の統計値と土質条件や植生および土地利用図などを組み合わせて、総合的な危険分布図を作成しようとする試みが増加している。

(安井春雄)